京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十一卷 第五號

昭和十五年十一月

紀元二千六百年記念論文集

ナチス勞働奉仕の原理

中川與之助

一　共同體的倫理としての奉仕

ナチス運動の最高目標は民族共同體（Volksgemeinschaft）の建設にある。從つてゲルマン民族の社會では政治も社會も經濟も文化も總ては共同體的に建設せられねばならぬ。否、ナチスの思想によれば民族は本來共同體なのである。自由主義は誤りて個人が集りて社會を形成するが如く說いたけれどもそれは人類生活の本質に反する。人類生活の基本的な且つ自然的な單位は民族である。民族こそ血の結合であると同時に生活の共同體（Lebensgemeinschaft）であり、[1] 民族生活は正しく人類にとりては「永遠の自然的な生活法則」（die ewigen naturgegebenen Lebensgesetze）或は自然法則（Naturgesetze）ともいふべきものである。[2] さればナチスがゲルマン民族の共同體を建設するといふことはこの自然的な民族の生活法則に復らうといふことを意味する。別言すれば、それは誤れる個人主義や階級主義に禍されて既に解體しかけてゐた獨逸民族を再び本來の共同體的なものに再建せよといふことなのである。個人主義は民族の本質を知らなかつたが、「民族は生ける全體」（lebendige Ganzheit）なるが故に統一した目的をもち意志をもち行動をもつてゐる。從つて又それは當然に有機的な組織をもち秩序と體系とをもつ。所謂個（Individum）はかゝる組織秩序體系の中に攝取せられたる肢體（Glied）に過ぎないのであつて、その何れの

1) 拙著、ナチス社會政策の研究 第九章參照。
2) L. Häberlein, Das Verhältnis von Staat und Wirtschaft. S. 18.

肢體をとつてもそれは全體の擔ひ手（Träger）であり、個人主義者の考へし如き本來自由なる個人や人間といふものは存しないのである。ナチスの個とはかゝる全體の部分としての肢體のことである。さて、かやうな個に就ての觀照の變化は當然に又從來の個人主義的倫理を一變せしむるに至つた。共同體的生活に於ては凡ての價値は共同體的價値であらねばならぬ。即ち共同體の爲に詳言すれば共同體の存續維持發展の爲に役立つならば共同體にとりて價値ありとせらるゝが、然らざるものは凡て非共同體的であり非價値的である。かの個人主義時代には、價値は凡て利己を規準として定められたが、共同體に於ける價値はかくの如き「我」（Ich）にとりての價値に非ずして「我々」（Wir）にとりての價値でなければならぬ。否、共同體時代には個人主義時代の如き「我」といふ意識（Ich-Bewusstsein）は拂拭せられて「我々」といふ意識（Wir-Bewusstsein）が之に代らねばならぬのである。[3] かくして共同體社會の價値は個人的價値に非ずして全體的價値であり、私益的價値に非ずして公益的價値であらねばならぬ。ナチスが「公益は私益に先つ」[4]（Gemeinnutz geht vor Eigennutz）の原則を高く揭げてゐるのも亦此理による。さて共同體的價値は右の如く全體的價値であり公益的價値であるが、それは又現實的具體的には常に政治的價値として現はれる。蓋し先にも述べし如く民族共同體は生ける全體であり生活の統一體である。從つて共同體にとりては民族生活の總ての分野が取扱はれねばならぬが、かゝる包括的な民族生活を統制し指導するものは實は政治（Politik）である。政治こそ共同體に統一的な組織と運營とを與ふる根源であり、民族をして民族生活をなさしむる紐帶である。換言すれば民族生活とはかやうな政治生活のことであり、民族とは「政治的民族」（Politisches Volk）に外ならぬのである。[5] かくて民族に始めて民族としての目的があり意志があり、行動があるのであり、民

3) O. Mönckmeier, Jahrbuch der nationalsozialistischen Wirtschaft. S 24.
4) 國民社會主義獨逸勞働黨政綱第二十四條參照。
5) L. Häberlein, a. a. O. S. 18.

族が目的の共同體(Zweckgemeinschaft)意志の共同體(Willensgemeinschaft)行動の共同體(Tatgemeinschaft)となりうるのである。されば上述せる如き共同體的價値とか公益價値とかいふも、それは勿論かやうな政治價値から無關係には存在しえない。否それは政治的にみたる公益價値であり全體的價値なのである。即ち何が全體的であり何が公益的であるかは獨自的に定まるものに非ずして政治的判斷に俟たねばならぬ。共同體に於ては政治的價値の大なるものが大なる共同體的價値を有する。茲に於てか共同體に於ける人々は政治的價値あることに自己を捧げることを共同體的倫理として要請せられるのである。

共同體的倫理は上の如く政治的にみて共同體に價値ある行爲をなすことの要請であるが、共同體に於ては外にあらはれし行爲であるとか業蹟であるとかよりも寧ろ內的或は精神的態度を重んずる。蓋し行動や業蹟は精神の表現にすぎざる故に根本は精神にありといはざるをえぬ。しかも共同體は「精神の共同體」(Geistesgemeinschaft)ともいはるゝ如くその結合の基礎は精神の一致にあるが故に尙更のことである。然らば次に共同體的精神とは何かといふに、それは單なる理性を指すのでもなく、又理性を精神の王座に据ゑることをも意味しない。ナチスに於ては理性よりも共同體的な感情や本能や衝動をより本源(Urquelle)的なものとして高く評價する。かれらによれば共同體は冷かなる理性の打算の所產ではなくして、血統を同うすることの認識から燃え上る本能的な同胞愛の具現である。ナチスが人々の共同體にとりての價値は、その人が如何なる事をなしたかといふことよりも共同體に對して如何なる精神的態度をもつかにかゝるといふのは共同體の本質をかくの如きものとみるからに由る。如何に外面的には多くの業蹟を積み上げても、その精神にして非共同體的なりせば、彼は共同體の破壞者と目せざ

るをえぬ。之に反して彼の給付する所は貧弱なりと雖も同胞愛に燃ゆるならば、彼の存在は共同體にとりて大なる價値ありといはざるをえぬ。要するにナチス共同體の基本精神は民族同胞への愛である。而もその愛たるや利己や功利の愛に非ずして血統を同うすることから來る民族的本能感情ともみうる樣な根强き熾烈な愛を指すのである。ナチスは然し乍ら理性や認識を不要なりとなすのではない。かやうな本源的な民族生活の本質を理知的に正しく認識することによりて民族同胞への愛や本能や感情の發露を合理化させやうとする。ナチスは個と全體との關係を說いて「民族は、切り離すべからざる宿命の共同體であり、その各肢體は相互に依存し合つて居り、總てが共働して始めて全體が生活しえ繁榮しうる。人間のこの世に生まるゝや全體から離れた個體 (Einzelwesen) としてではなく共同體の肢體としてあらはれ、その行動に於ては唯共同體的に拘束されたる本體 (gemeinschaftsgebundenes Wesen) としてのみあらはれる」となし或は又、個人主義者は個人に創造の能力ある如くいふけれども、[6] 創造は共同體の中にありてのみ可能なのである。內的强さ (innere Stärke) と大なる衝動 (grosse Impulse) を創造するものは實に民族である。民族共同體[7]を離れては個の創造も發展もありえない。されば全體の爲にも、個の爲にも、全體を生かす全體を繁榮さすことこそ根本的問題でなければならぬとなす。かくして道德感情に於ても理知に於ても、ナチスにとりては結局は全獨逸民族の福祉 (Wohl des gesamten deutschen Volkes) に奉仕するといふことが倫理的な最高原則となつて來る。勿論この民族の福祉とか或は一般の福祉とかいふことは先に述べたる政治的民族の本質に照して具體的には政治的に決定せらるゝそれに外ならぬ。さてかやうに民族共同體の福祉といふことを倫理的な最高原則となすといふことは、言ふまでもなく全體の福祉の實現を以て共同體の從つて又共同體を

6) L. Häberlein, a. a. O. S. 113.
7) L. Häberlein, a. a. O. S. 2.

構成する肢體の任務であり責任であるとせらるゝことを意味する。實にこの全體に對する責任の觀念こそ共同體的倫理實踐の根本的發條である。共同體に對する責任觀念のなき場合或はその薄き場合如何なる共同體的倫理も一片の空辭と終らざるをえぬ。これナチスが「獨逸社會主義とは義務の責任自覺的社會主義 (ein verantwortungsbewusster Sozialismus der Pflichten) なり」[8] といひ「民族に對し、將又自己自らに對する最高の責任 (höchste Verantwortlichkeit) こそ國民社會主義的政治の基礎である」[9] と叫んでゐる所以である。既にして全體に對して而して又全體の部分としての自己に對して全體的責任を感ずるものは、その責任の爲め義務の爲めには如何なる犧牲をも厭ふべきでなく敢然としてその實踐に當らねばならぬ。實踐なき行動なき責任や義務は無意味である。ナチスの所謂社會主義とは「內的態度 (innere Haltung) の間斷なき實現であり」[10] 義務と結ばるゝ行動や責任及び全體への奉仕といふことこそその眞髓をなすのである[11] といふ。勿論人々がその責任と義務から行動をなすに當つて全體的な秩序や規定又は指導に忠實に從順であり、その給付や勞働に於て勤勉であるべきことはいふまでもなからう。かくして共同體社會に於ける倫理的要求として責任や義務心は更に規律・服從・忠實・勤勉等の諸德を必然的に生むに至るのである。吾人は以上、共同體に於ける倫理的價値としての全體的價値・公益的價値を說き更にそれらが具體的には政治的價値によりて決定せらるゝことを述べ、進みて共同體に於ける人間的價値は行動的業績的價値よりも內的・精神的價値にありとなし、共同體に於ける人々の精神的態度の基本は民族同胞への愛なりとなし、而して共同體への愛は共同體への責任となりこの責任は更に忠實勤勉服從規律等の諸德を生むことを述べ來つた。私は共同體に於ける倫理的要求を外觀的表面的なものより次第に內へ內へと掘り下げ來つたのであるが要するに

8) L. Häberlein, a. a. O. S. 91.
9) G. Feder, Der deutscher Staat, S. 13.
10) L. Häberlein, a. a. O. S. 91.
11) L. Häberlein, a. a. O. S. 91, 96.

はナチス共同體的倫理の根本は利己を滅ぼして公に捧げること卽ち全體への或は共同體への奉仕といふことにつきると考へる。ナチス共同體の價値が公益的全體的政治的價値であるといふのも、社會倫理として責任・義務・忠實・服從・規律・の尙ばれるのも悉くは共同體への奉仕の爲である。洵に利己的な小我を亡ぼして共同體的な人格となりて共同體的我の立場から歡んで積極的な奉仕をなすことこそ共同體の根本倫理である。ナチスが「民族に對する奉仕」(Dienst am Volk) 卽ち民族に對する義務履行と給付とを以て社會倫理の無上命令なりとなしてゐるのも亦この理による。民族共同體に於ける倫理は右の如くなるが、かゝる倫理はナチスの民族鬪爭的世界觀に於ては更に一層强調されるのである。蓋し民族を不斷の鬪爭の裡にあるとみる以上、各民族は常にナチスの所謂鬪爭共同體 (Kampfgemeinschaft) に組織されて居らねばならぬ。而して所謂總力戰といはるゝ近代戰爭に於ては鬪爭の勝敗は國民總力の如何によりて決定せらるゝ。茲に於てか一層國民各自の全體への責任と給付とが卽ち奉仕が要請せられざるをえぬ。かくしてナチスの奉仕的精神と奉仕的制度とは民族共同體の理論に於て將又鬪爭共同體としての民族觀に於て一層發展せしめられつゝあるのである。ゲルマン民族の生々發展のために總ての人がそのあらん限りの能力を捧げることこそナチス共同體にとりての一般的な倫理である。[12]

二　共同體經濟と勞働奉仕

吾人は前段に於て全體への奉仕といふことを以て共同體倫理を特色付うけるとなした。この一般的基本的倫理は又當然に經濟に於ても適用されねばならぬ。ナチスの經濟觀によれば、經濟は民族の爲の經濟であり全體の爲

12) L. Häberlein, a. a. O. S. 88.

の經濟にして個人の爲にも資本の爲にも存するのではない。卽ち經濟は本質的に『民族』或は『國民』の經濟(„Volks" wirtschaft)であつて、所謂私經濟(Privatwirtschaft)でもなければその集計でもないのである。更に詳言すれば、經濟は民族の需要充足(Bedarfsdeckung)の爲に存し或は民族的價値創造の爲に存するのであつて、個人にとりての收益性(Rentabilität)の爲に存するのではない。卽ち經濟は飽く迄も民族に奉仕すべきものにして資本や物に奉仕すべきものではない。ヒトラーも「民族は經濟の爲に生きるに非ず、又、經濟は資本の爲に存するのでもない。否、資本は經濟に奉仕し經濟は民族に奉仕するのである」[13] („Das Volk lebt nicht für die Wirtschaft, und die Wirtschaft existiert nicht für das Kapital, sondern das Kapital dient der Wirtschaft und die Wirtschaft dem Volk!") と喝破してゐる。個人主義經濟は個人に奉仕し資本に奉仕して全體や國民の必要を無視してゐたが、經濟は經濟の爲の自己法則によりて動くものにしてそれは止むをえないとされた。ナチス經濟に於ては民族こそは自己目的(Selbstzweck)であり最高價値でありて如何なる組織も機構もこの民族を手段視し或は客體視することを許されない。否總ての組織機構は民族といふ主體の福祉の爲にその生成(„Volk"-werdung)の爲にのみ存すべきものである。從つて經濟といふ組織も亦民族に奉仕すべきものにして、民族への奉仕といふ關係を離れては經濟たるの意義をなさぬ。經濟は本質的に共同體經濟(Gemeinschaftwirtschaft)であり國民經濟であり私經濟や利益經濟(Interessewirtschaft)であるべきではない。卽ち經濟は民族を擔ひ民族に關係する經濟[14](Volksgetragene und Volkbezogene Wirtschaft)であり、經濟の中に民族が沒却するに非ずして、經濟の中にも民族が自己をみ出して行くものでなければならぬ。經濟一般と民族との關係は又經濟を構成する資本や貨幣や財產や企業や經營や組合等に就ても亦妥當する。

13) L. Häberlein, a. a. O. S. 46.
14) L. Häberlein, a. a. O. S. 48.

卽ちこれらの資本や貨幣や財産や企業や組合は悉く民族に奉仕すべきものにして如何なるものにも獨自の存在や價値を認むべきではないのである。洵に民族への或は全體への奉仕といふことこそナチス經濟の根本である。而しこの全體への奉仕といふことは、かの公益は私益に先立つといふ道德的要求とも合致するのであり、共同體に於ける道德と經濟とは全く一致して何等矛盾の存すべきものでなくなる。之を要するに民族に對する奉仕と從つて又その責任は新しきナチス經濟の根本性格を作つてゐる。ナチスが「全體への責任は新經濟の宗教なり」[15]とまでいつてゐるのも亦かゝる奉仕の責任を强調せるものである。

吾人はナチス經濟と民族との關係を述べて民族に奉仕することこそナチス經濟の本質なりとなしたが、かくの如き奉仕的經濟の意味に就て若干の說明を加へねばならぬ。旣に先に考察せる如く民族とは政治的に統一せられたる共同體である。卽ち民族は本質的に政治的民族なのである。從つて經濟をして民族に奉仕せしむるとはかゝる政治的民族の政治的目的に奉仕せしむることを意味する。ナチスにとりては「經濟はそれ自體何の意味もなくかれが奉仕するかれ以上の高度の政治的理念から始めて意義をもつ[16]のである。政治に奉仕する經濟にありては經濟行爲の凡てが獨自の目的をもつものに非ずして政治目的を擔ふものでなければならない。かやうに經濟行爲をして政治目的を擔はしめんが爲には先づ經濟がかゝる政治目的に副ふ樣に組成されねばならぬ。換言すれば經濟を組織するものは經濟に非ずして政治である。經濟の政治化或は言葉の正しき意味に於ける政治經濟 (Politische Wirtschaft) こそ眞の經濟の姿なのであり、政治目的から超然たる或は政治を支配する經濟といふが如きは政治的民族に於ては到底考へられないのである。茲に於てかナチス時代に至りて、經濟の政治に對する優越 (Primat der

15) E. Rosten, Das ABC des Nationalsozialismus S. 114.
16) L. Häberlein, a. a. O. S. S. 47.

(ökonomie) であるとか、經濟のための經濟法則であるとか或は又自然法則としての經濟法則といふが如き諸概念は全く棄てらるゝに至り、之に代りて政治の優位 (Primat der Politik) が高唱せられ、「經濟が國家政策を動かすに非ずして民族生活の必然性が經濟を動かすのである」[17] とせらるゝに至つた。ナチス經濟は政治經濟であるといつても、それは必ずしも經濟機構を國家化 (Verstaatlichung) することを意味しない[18]。現にナチス獨逸では私有財産も私的企業も認め否寧ろそれを基礎として國民經濟を運營してゐる。乍併、政治目的の變化によりてそれは又種々に變革せしめらるゝことを考へらる。經濟に永久の法則や獨自の法則がなく政治的に變化せしめられてゆく所に政治經濟の特質が存するのである。

ナチスの一般經濟觀は右の如くなるが、吾人は進んで經濟と勞働との關係を述べねばならぬ。さて經濟は民族の爲に奉仕せねばならぬがかゝる經濟にとりて本質的重要性をもつものは何であるかといへば、ナチスにありてはそれは實に勞働 (Arbeit) である。茲に於てか奉仕經濟の根本問題は勞働奉仕 (Arbeitsdienst) といふことになる。この事に就て今少しくナチスの思想を檢討しやう。

自由主義や資本主義は資本を以て經濟の根本の如く考へたがそれは誤りである。ナチスによれば經濟の根本は勞働である。「總ての經濟に於て勞働が先立つ。人間は考へる前に呼吸する如く人間は經濟をする前に勞働する。經濟は勞働の組織でありてそれ以外ではない[19]」資本が先づありて勞働が生まれ經濟が生まれて來たのでなくして勞働が資本を生み經濟を創り出したのである。勞働なくしては如何なる資本も經濟も生まれえなかつたであらう。かるが故にナチスが經濟の根本を勞働なりとなすことは之を正しとせねばならぬ。資本家社會に於ては資

17) E. Rosten, a. a. O. S. 110.
18) 拙著、前掲書、S. 163.
19) L. Häberlein, a. a. O. S. 50.

本は勞働に對する優越權を有し恰も勞働の創造者は資本である如くみゆるけれども、之は歴史的な資本家的機構の然らしむる所にして事物の本質に反する。蓋し人間勞働が從つて又人間が資本或は物に支配さるゝといふが如きことはありうべからざることであり、殊に民族を最高價値となすナチス共同體にとりて根本的に排擊せらるゝ所である。ナチスにとりては資本も亦人間に勞働に奉仕すべきものにして、[20] 資本家社會に於ける如く勞働が資本の隷屬者の如く輕蔑せらるゝは本末を顚倒するものである。要するにナチス主義に於ては勞働こそ經濟の根本であり經濟とは「勞働の組織」である、經濟をかやうに考へることによりて始めて經濟は國民のものとなり民族のものとなり經濟によるそして又勞働による國民の民族への奉仕が可能になる。資本家社會に於ては資本はその資本法則の故を以て屢々國民の民族への奉仕を阻却した。卽ち資本は國民を民族から隔絶したが、かくの如き共同體に於ける非本質的關係を解消して國民をそして國民勞働を民族に直接に結ぶこそナチス經濟政策の要諦なりとされる。勞働は經濟の根本なりと雖も資本を斥けることを意味しない。否、資本は勞働の所產である點に於て尊きのみならず、言ふまでもなく資本は勞働を助けて國民の民族への奉仕をより效果的ならしむる。然しそれは飽くまでも資本が全體への奉仕性をもつた場合にして、資本家的性格をすてざる場合に於ては必ずしも勞働を助けると限らぬ。さればナチス國家に於ては資本も財產も民族への奉仕の爲に存する原則の確立を根本となされるのである。

さて如上のナチス的經濟觀・勞働觀を以てすれば、勞働こそ經濟の根本であり勞働奉仕こそ經濟奉仕の基礎なりといはざるをえぬ。ナチスによれば經濟は民族のためであり民族へ奉仕する爲に存するのであるが勞働は經濟

20) L. Häberlein, a. a. O. S. 85.

への奉仕を通して民族に奉仕するのである。國民各個の勞働による卽ち給付・奉仕貢獻が大なれば大なる程國民經濟は繁榮し民族は繁榮する。之に反する場合は國民經濟も民族も衰頽するの外ない。されば民族の興亡盛衰を決するものは實に國民の勞働による奉仕の如何によるのであり、勞働者にこそ民族の運命がかゝるものと斷ぜざるをえぬ。勿論茲に勞働者といふのは筋肉勞働者のみを指すに非ずして、專ら或は主として精神勞働に從事する失業家やサラリーマンをも包括するナチスの所謂「創造的人間」(Schaffende Mensch)の義である。[21] かやうにして新しき共同體に於ては國民に對して勞働・給付の道德的義務を要請するのみならず、國民も亦勞働給付による國家民族への奉仕を國民的權利であり名譽であり光榮であるとして之を國家に希求するに至つた。「勞働は再び國民への奉仕としてその眞の意義にまで高められ」、[22] 「勞働は第三帝國の國民的倫理となり」、[23] 人々の社會的價値は國家・民族に對する勞働・給付の如何によりて決定せらるゝ樣になつた。實にナチスにとりては民族共同體は「仕事の共同體」(Werkgemeinschaft)であり、「勞働と給付の共同體」(Arbeits und Leistungsgemeinschaft)[24] であり、ナチス新國家は「勞働と給付の國家」[25] であり、「獨逸社會主義は勞働者の社會主義なり」[26] とせられ、かるが故に「勞働を尊重し勞働者を尊敬せよ」(Ehret die Arbeit und achtet den Arbeiter) と高らかに叫ばれてゐるのである。

三　ライヒ勞働奉仕制度の意義

吾人は勞働奉仕の精神を以てナチス共同體經濟の根本なりとなした。洵にこの勞働奉仕の眞精神の國民に普及徹底することが、ナチス經濟の從つてナチス共同體勃興の基礎である。乍併、かゝる勞働奉仕の精神はナチス的

21) 拙稿、ナチス社會主義に於ける勞働觀參照。
22) L. Häberlein, a. a. O. S. 102.
23) L. Häberlein, a. a. O. S. 103.
24) 25) L. Häberlein, a. a. O. S. 94.
26) J. Hellauer, Der Genossenschaftsgedanke im nenen Staat S. 4.

世界觀民族觀さては經濟觀から生まれ來るのであつて、これらの新思想が正しく理解さるゝに非ざれば勞働奉仕の新精神も亦理解されないのである。詳言すれば前時代の如き個人主義自由主義唯物主義が根本的に拂拭せられて新しき思想が芽生ひ育てられねばならぬ。即ち思想の變革・價値の轉換が行はれねばならぬ。併し前時代の思想的殘滓を尙多分に有してゐる一般國民に一朝にしてかゝる思想の變革や價値の轉換を求むることは至難である。茲に於てかナチスは思想の未だ固らざる青年の精神教育行動の訓練から着手した之が所謂ライヒ勞働奉仕制(Reichsarbeitsdienst ＝略して RAD) である。

ライヒ勞働奉仕制は一九三五年六月廿六日のライヒ勞働奉仕法(Reichsarbeitsdienstgesetz)に生まれた。それに據れば「ライヒ勞働奉仕は獨逸國民の名譽勤務(Ehrendienst)であり」(同法第一條一項)「總ての獨逸青年男女はライヒ勞働奉仕に於て其の民族に奉仕すべき義務を有す」(同第一條二項)るものとせらる。即ちライヒ勞働奉仕はかの兵役義務の如く獨逸青年に義務的に課せらるゝいはゞ强制勤務にして自由奉仕ではないのである。それが特に名譽勤務といはるゝ所以は、かゝる勤務は何等賃銀を目的とする勞働契約によりて生まるゝものに非ずして無私無慾(uneigennützig)只管民族共同體の爲に全獨逸の經濟的再建の爲に奉仕するといふ意味からであり、かゝる勞働奉仕は國民の崇高なる人格・名譽の表現なりとせらるゝことは、懲役刑に處せられたる者・公民權を有せざる者・刑法第四十二ィ條による保安及び矯正の處分に服したる者・國民社會主義獨逸勞働黨より名譽毀損行爲により除名せられたる者・反國家的行爲により裁判により刑に處せられたる者(同法第五條)及びアーリア民族以外の民族に屬する者又はアーリア民族以外の民族に屬する者と結婚したる者に對してはライヒ勞働奉仕に參加することを許さず(同法第七條)

と規定せられてゐるに徴しても明かである。さてかやうなライヒ勞働奉仕の義務は早くとも滿十八歳に達したる後に始まり遅くとも滿二十五歳に達したる時を以て終了する（同法第三條第二項）ことゝなつてゐる（女子に就ては特別法規による）

ライヒ勞働奉仕の主目的は吾人が先にも述べし如く青年と精神教育の訓練にある。このことはライヒ勞働奉仕法も明白に掲げて「ライヒ勞働奉仕は獨逸青年男女をば國民社會主義の精神に基き民族共同體眞實の勞働親就中手工勞働（Handarbeit）への至當なる尊敬を目標として教育すべきものとす」（同法第一條第三項）となしてゐる。詳言すればナチスは將來國民の支盤となるべき青年層に新しき共同體理論を吹き込み殊にはナチス經濟の基本とせらるゝ勞働による民族への奉仕精神を實踐的訓練によりて徹底的に與へんとするのである。勿論かゝる勞働が教育や訓練の方便であるばかりでなくそれ自體國民經濟の建設に役立つのであり、從つて又ライヒ勞働奉仕制は獨り精神的教育の爲のみならず經濟的建設にも利用されつゝある。ライヒ勞働奉仕制が失業克服の一手段として或は又土地を開拓耕作して獨逸食糧政策に貢獻しつゝあることは人の普く知る所であるが、その他住宅建設・自動車道路建設・街道建設・堤防築造水路建設・海岸沼地埋立・造林・森林・道路建設等或は通交の改善擴張に或は土地改良・土地擴張等の仕事がなされて來た。而してライヒ勞働奉仕が主として農業的勞働及び手仕事によれることには特別の理由をもつのである。ナチスは血統と共に土地をかれらの共同體の核心的要素となすものであるが、このライヒ勞働奉仕制度を契機として、獨逸青年わけても都市の青年を固く獨逸の土地・自然に結ばんとするのであり、又一方には獨逸青年をして民族共同體の何たるかを知らしむるには、彼等の生活の資料がいかにして獲得せられるかといふことの理解即ち農業及び食糧問題の理解こそ最も捷徑であり且つ、根本なりとするによるもの

であり、更にライヒ勞働奉仕が鋤鍬を以てする手仕事たることは、新時代に於ける勞働の理論を身を以て體驗して徹底的に舊時代の如き營利手段としての勞働觀や商品としての勞働觀を克服せしめんとする事にある。體驗なくして勞働の價値や尊さを知るといふことは不可能であり、勞働に對する正しき把握なくして新しき勞働・給付の共同體が建設せられうべくもなく、從つて又民族の再建も期待し得られざるが故に筋肉勞働への訓練・理解を以て新國家建設の基礎なりとなす等の諸理由による。

ライヒ勞働奉仕制の教育目的や經濟的利用を述べた吾人は更に之が社會的・政治的任務に就ても考察を加へねばならぬ。先づライヒ勞働奉仕が社會的集團的に行はれるといふことの社會的意義から考へやう。ナチスが社會政策として最も腐心せる點は新しき獨逸國に於て前時代の如き階級的利己主義又は階級的對立を克服・解消しやうといふことである。蓋しかれらの目指す民族が一つの精神となり一つの手足となりて動くが如き統一は、內部的に分裂抗爭してゐる樣な場合には到底之を期待しえざるが故である。それ故にナチスは政權獲得と同時に階級主義の撲滅とその組織の一掃に着手したのであつた。この社會的融和統一といふ社會政策的任務が矢張このライヒ勞働奉仕制に織り込まれてゐる。ライヒ勞働奉仕制度に於ては富豪の子弟も貧民の子弟も都市の青年も農村の青年も皆一樣に獨逸青年として勞働による流汗の鍛錬をうけねばならぬ。そこには何らの階級的特權も差別もない。等しく「勞働の一兵士」である。かくして社會各層の人々が數ヶ月寢食を共にし勞働の苦樂を共にするに於ては、從來全く知られざりし社會各層間の理解が深まるのみならず、又、新しき生活・訓練の體驗は新しき思想教育と相俟ちて、血によつて結ばるゝ運命を同うする同胞への愛を、そして又祖國・民族に對する責任と義務を

分つ同志・仲間（Kamerad）としての愛を深めて、茲にかれら青年の生涯を支配し方向附ける精神的基礎が確立せらるべく、この訓練を通じてえらるゝかゝる精神的・内的體驗と新にえられる社會的結合とは全く新しき社會人と新しき社會體制を準備するのである。更に又、この勞働奉仕制による勞働の配置は、都會人をして或は農村に、或は北方獨逸人を南方獨逸へといふ樣に、人々をして且つて知らざりし祖國獨逸の地方・文化・產業を知らしむるに至り彼等の祖國民族に對する愛と理解と責任とをより一層深刻に感ぜしむるに至る。要するに勞働による民族への奉仕といふことはナチス勞働政策の根本なるが、その勞働は個別的勞働に非ずして社會的勞働である以上、勞働を社會的に組織し訓練することこそ、換言すれば社會的勞働の奉仕をなさしむることこそナチスの當然の方策でなければならぬ。ライヒ勞働奉仕制はかやうな目的から社會的勞働奉仕の訓練をなさうとするものである。

ライヒ勞働奉仕制の社會的意義をみたる吾人は更に進みてその政治的意義に及びたいが、茲に政治的とは民族生活の全領域を包括する樣な廣い意味に非ずして、經濟政策社會政策文化政策等と對立せしむる政治の意味である。かやうな立場からライヒ勞働奉仕制のもつ最大の任務は新しき政治的原理としての指導者原理（Führerprinzip）への國民的訓練である。指導者原理の何たるかは吾人の既に屢々述べたる所にして之[27]を茲に詳說しないが、指導者（Führer）によつて國民を指導せんとするものである。指導者は獨裁者でもなければ又多數決主義によつて選出されたる代表でもない。彼は最も豐富なる共同體的人格と優秀なる能力手腕を有するいはゞ「國民の最優者[28]」（Bester des Volkes）である。今のナチス國家は政治といはず經濟といはず、社會といはず、國民生活の全領域はか

27) 拙著、前揭書 第五、六章 參照。
28) W. Decker, Die politische Aufgabe des Arbeitsdienstes S. 20.

ゝる指導者によつて指導されてゐるのであるが、この新しき社會の指導原理は舊き民主主義制のそれとは根本的に異るものなるが故に、國民にとりては全く新しき生活の展開であるといはねばならぬ。然もこれがナチス政治の根本原理である以上、この原理が國民に徹底するに非ればナチス政治は發展するをえない。かくてナチス國家にとりては新しき指導制の訓練をなすことゝ、かゝる指導者を養成することゝを以て、政治的に最大の任務となさゞるをえぬ。ライヒ勞働奉仕制は獨逸青年をしてこの指導者制への訓練を與へ且つかれらの中から新しき國民的指導者を選拔せんことを目的とするのである。勞働奉仕に參加する青年は社會のあらゆる身分・職業・家柄からなるに拘らず、例へば、ライヒ勞働奉仕制の指導者を選ぶに當りては、何等これらの事情に拘泥せず、眞に人格と能力の卓越せるものを選ぶことは、從來の階級的支配制を打破するものにしてこゝにも新しき社會の現出を思はしむる。ナチスは指導者選拔（Führerauslese）と指導者教育（Führererziehung）とを以て、總ての時代を通じてかれらにとりての最も重要なる任務となし。[29] ライヒ勞働奉仕制の下に上述の如き立場から即ち社會のあらゆる階層から優秀なる人物を選び出さうとしてゐるのである。ライヒ勞働奉仕制の下に鍛へられたる指導者が社會のあらゆる領域に分布されて指導的役割を演ずるはいふまでもない。ナチスが國民的指導者をかゝる勞働奉仕制を通じて選び出し且つ鍛へんとしてゐることは特に注意せらるべき所であらう。彼等は精神や人格は理論や思想から生まれるに非ずして生活・體驗・實踐・行動を通じて生まれるのであり、又人々の眞の人格や精神はそれらを通じて始めて確證せらるゝのであるとなす。獨逸の土に即して始めてハイマートとして獨逸が知られ、勞働に從事して始めて勞働の尊さを知る。體驗こそ實在（Wirklichkeit）であり思想や理論は單に觀念（Begriffe）にすぎない。[30]

29) W. Decker, a. a. O. S. 16.
30) W. Decker, a. a. O. S. 15.

生活自體が民族・鄉土・勞働になりきつたときこそ眞にナチス的人格者である。かやうな立場から指導者も勞働の戰線から・勞働の共同體から勞働者宿泊所の實際生活から出すべきものとせらるゝのである。ライヒ勞働奉仕制は又一方に於て國防目的をもつ。勞働奉仕による訓練は青年の身心を鍛錬して未來の兵士の準備をなすのみならずかれらが鍬をすてゝ銃をとる場合、優に軍事的勤務をなしうるのである。ライヒ勞働奉仕制の實施そのものは國民の國家に對する奉仕意志の旺盛とその準備の充實せる證左として對外外交の武器にも利用せられえた。

以上吾人の述べ來れる所を要するに、ライヒ勞働奉仕制は教育・經濟・政治・社會上の諸目的を有するが、かゝる諸目的は一言にすれば民族への奉仕目的なりとなしうる。民族への奉仕としての經濟がかゝる文化・社會・政治の奉仕的な訓練によつて愈々その實をあげうることは言ふまでもなく、ライヒ勞働奉仕制の經濟上にもつ意義は極めて大なりといはざるをえぬ。

結　論

吾人は民族・國家の爲の勞働奉仕の精神がナチス經濟の本質的特色なりとなした。而してかゝる勞働奉仕の思想の現はれ來つた根源を明にする爲にナチス的世界觀から生まれし民族共同體から說きて國民的倫理に及びナチス國家に於いて個は全體の爲に卽ち民族の爲に價値ある存在たるべく、かゝる價値ある存在とは彼が公益の爲に卽ち全體的利益の爲に創造・給付をなすことにあるとなした。洵に民族共同體に於ては「一般的福祉」(Das allgemeine Wohl)「全獨逸民族の福祉」(Wohl des gesamten deutschen Volkes)「民族の福祉」(Volkswohl)といふことが國民倫理の最高法則となつてゐる。從つて又民族の福祉に奉仕することは獨り經濟や勞働に對する要請たるのみでなく、國家にも政治にも法律にもその他教育・科學・軍事・外交といはず一切の領域に對しての要請であり、勞働奉仕といふのもかゝる國民的奉仕の一肢をなすに過ぎぬのである。ナチスに於ける勞働奉仕の一般的倫理からみ

たる意義はかくの如くであるが、特に經濟的にみての重要性は、それが新しき經濟觀から生まれしものであると同時に、その精神は新しき經濟組織を建設してゆくであらうといふことである。蓋し經濟は民族へ奉仕すべきものであるといふ原則は上述の如く共同體的原則から生まるゝのであるが、かゝる原則の精神は舊き經濟原則卽ち資本や物に奉仕せる經濟、或は經濟の自然法則に縛せられた唯物的な宿命的な經濟、個人の收益を主目的とせる經濟、所謂經濟人 (Homo economics) としての經濟を根本的に打破せねばやまぬからである。ナチスにとりては經濟は民族的需要を充足する爲であり民族生成の爲である。資本や物に奉仕するに非ずして民族・同胞に奉仕する人間經濟 (Menschen ökonomie) こそナチス經濟の本質である。而してナチスはかゝる民族の爲の經濟卽ち民族的需要の調達をなすものこそ勞働なりとなす。從つてかれらは勞働こそ民族生存の基礎であり、あらゆる經濟價値の源泉であり經濟組織の根幹をなすと考へる。從つて勞働を以て個人主義者の如くに自己の爲となさず、社會のためであるとなし又かれらの如く勞働を個人的自由であり、「人間的權利」と認めずして社會の爲の義務であり責任であると考へる。勿論それは勞働が强制せらるゝことを意味せず、全體と個との又民族と國民との血統的・倫理的・社會的關係の認識から生まるゝ高次なる人格の表現としてのそれである。かゝるが故に勞働は又光榮であり歡喜であるとせられる。さてかやうな經濟や勞働に對する觀照の變化は從來の經濟精神や制度と根本的に相容れざるものであり、經濟をして將又勞働をして眞に國家・民族に奉仕せしめやうとせば利己に奉仕した個人主義的經濟制度の變革は洵にやむをえぬのである。ナチス的勞働奉仕の精神は新しき世界觀から生まれしが、一旦生まれし新精神は又舊き精神に盛られた經濟制度を打破して新しき經濟を樹立するに至るであらうことはかくて疑ふべからざることである。吾人は又かゝる新しき然もナチス經濟再建にとりて根本的重要性を有する勞働奉仕の精神を國民に扶植する爲の制度としてライヒ勞働奉仕制を檢討した。これによつて獨逸の青年勞働が如何に社會

的經濟的・政治的に訓練せられてゐるかを述べた。ライヒ勞働奉仕制度は新しき世界觀・民族觀・勞働觀を國民に體驗せしむる國家的義務的制度にして、獨逸青年はこれを經て始めて眞の新しき獨逸人になりうるものとせられる。祖國の土に卽して民族同胞の生活に貢獻する爲に貧富上下の差別なく獨逸青年が自ら鍬をとりて勞働に從事するといふことは、つい昨日まで激しき階級鬪爭の演ぜられてゐたことを知るものにとりては大なる變化といはざるをえぬ。ライヒ勞働奉仕制の目的は形式的な精神訓練や勞働の訓練ではなくして、人間の本質を變革せしむることにある。その勞働は勞働の爲の勞働に非ずして、ナチス的世界觀・民族觀を把握せしむる爲の行としての勞働であり、又、かゝる世界觀・民族觀を把握せるものゝ表現としての勞働である。ライヒ勞働奉仕制は獨逸社會主義への道場であり學校である。ナチスがこれを目して「國民の學校」(Schule der Nation)「國民社會主義の高等學校」(Hochschule des Nationalsozialismus)「國民教育學校」(Volkserziehungsschule) などとなすもこの意義からである。かやうな制度を通じて鍛へ上げた國民を糾合して國民的な一大勞働・給付の共同體を建設し以て民族的活躍をなさうとするのがナチス政策の目標である。新しきナチス世界觀は新しき國家を生み新しき經濟を生み新しき勞働を生むに至つた。ナチス勞働奉仕はかゝる一聯の關係に於て之を理解さるべく、かの個人的なもの自由意志的なもの或は宗教的なものと本質的にその性質を異にする。ナチス勞働は政治化されたる勞働であり政治的意の圖下に組織された勞働である。洵に勞働奉仕の精神こそナチス經濟の從つて又勞働政策の根本なりとせねばならぬ。ナチス國家にとりては國民が道義的に積極的に捧ぐる勞働をいかに管理すべきかゞ次に經濟政策勞働政策上の重大なる問題となつて來る。勞働による國家的奉仕と國家的による勞働の管理これが、ナチス獨逸の經濟政策の二大問題となる。勞働の管理は更にその中に多くの問題を含む。これらは稿を別にして取扱はれでるあらう。

(紙數の都合上所論の一部を除いたが他の機會に之を補ひたいと思ふ) (八・一〇)